

「千字文」を書きましよう！

千字文を練習する時、少し知識をもって、千字文に向かうと、さらに興味深く練習できるかもしれないですね。

◆「千字文」の内容は？

千字文は「天地玄黄」から「焉哉乎也」まで、天文、地理、政治、経済、社会、歴史、倫理などの森羅万象について述べている。四字を一句とする二百五十の短句からなり、全体が脚韻により九段に分かれている。

◆「千字文」は何のために？

中国古代より児童の文字を学ぶ初歩の教科書として広く利用され、中国より伝来された日本でも習字の手本として古くから親しまれている。

◆「千字文」はいつだれが作った？

中国、六朝時代の教科書。晋の王羲之の筆跡を集め、重複しない千の漢字を二百五十句の四字句に綴ったもの。ごく最近まで識字と習字のための初心者用教科書として用いられ、陳、隋の智永、唐の歐陽詢、褚遂良らの名跡も含まれている。

南朝梁(502-549)の武帝が、文章家として

しやうけんし

有名な文官の周興嗣(470-521)に文章を作らせたものである。周興嗣は、皇帝の命を受けて一夜で千字文を考え、皇帝に進上したときには白髪になっていたという伝説がある。

◆「千字文」は千字違う？

全て違った文字で、一字も重複していない。ただし「女慕貞潔」の「潔」と「紈扇貞潔」の「潔」は音も意味も同じであり、テキストによつては両方「潔」に作つたり、「潔」の異体字の「潔」に作るものもある。

数字では「一」「三」「六」「七」、方角では「北」、季節では「春」、地理では「山」が無いなど、初学者に必要な漢字が抜けている。二百三十三文字が日本の常用漢字外である。

◆「千字文」を書いたのは？

能書家として有名な東晋の王羲之の字を、殷鉄石に命じて模写して集成し、書道の手本にしたと伝えられる。王羲之の字ではなく、魏の鍾繇の文字を使ったという説もある。完成当初から非常に珍重され、以後各地に広まっ

ていき、南朝から唐代にかけて流行し、宋代以後全土に普及した。

書道の手本としては、智永が楷書と草書の二種の書体で書いた『真草千字文』が有名である。その後、草書千字文、楷書千字文など、様々な書体の千字文が作られた。また、篆書、隸書、楷書、草書で千字文を書いて並べた『四体千字文』などもある。他にも数多くの歴代の能書家が千字文をそれぞれの書体で書き、遺されていて、法帖により私達も日常目に触れることが多い。

◆「千字文」の利用は？

千字文は、日本のいろは順などのように、番号として使われることがあった。例えば、科挙では受験生の個室へ行く通路を千字文で区別した。またある富くじでは、千字文の最初の八十文字(天から皇まで)からいくつかをハトに選ばせ、当たった文字数によって賞金を得るしくみで使われた。

◆「千字文」は他にもある？

『続千字文』(待其良器、宋時代)『集千字文』(徐青藤、明)など類似本が出されたが、周興嗣作の千字文が最も普及して、現在に至っている。

◆日本に伝来された千字文は？

各地から見つかる律令期から奈良時代のものの中に、文字の練習や書籍の文字を書き写したものがあり、それを「習書」と総称する。この習書木簡に多くみられるのが『論語』と『千字文』であるため、漢字を学ぶ手本として比較的はやく大陸からもたらされていた。正倉院へ光明皇后が寄進したときの目録『国家珍宝帳』(751)や、最澄が延暦寺に納めた図書目録等他にも多くの千字文についての資料が遺されている。

ここでは、簡単に千字文の概略を紹介致しましたが、書物やインターネットでさらに詳しくしらべてみてはいかがでしょうか。

皆さん 千字文へ挑戦してみましよう。

快い達成感が味わえることと思います。(悦舟)